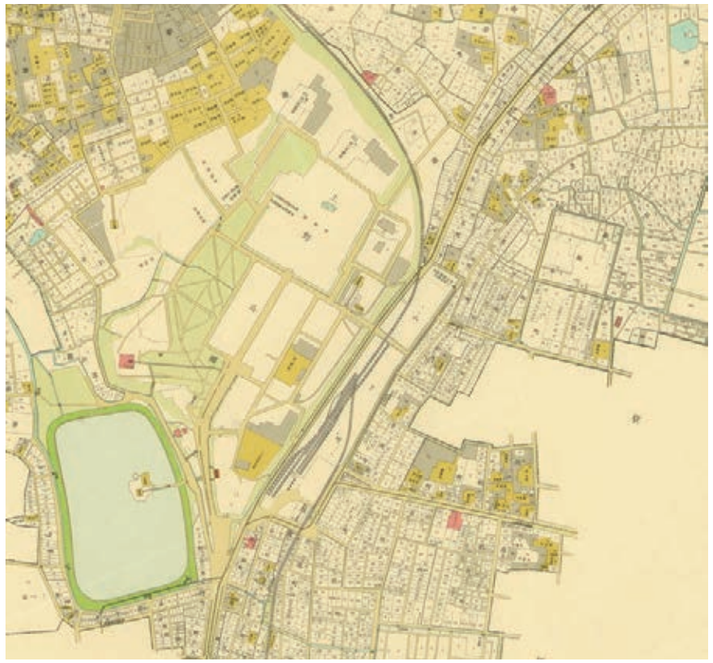
07 都市公園の誕生

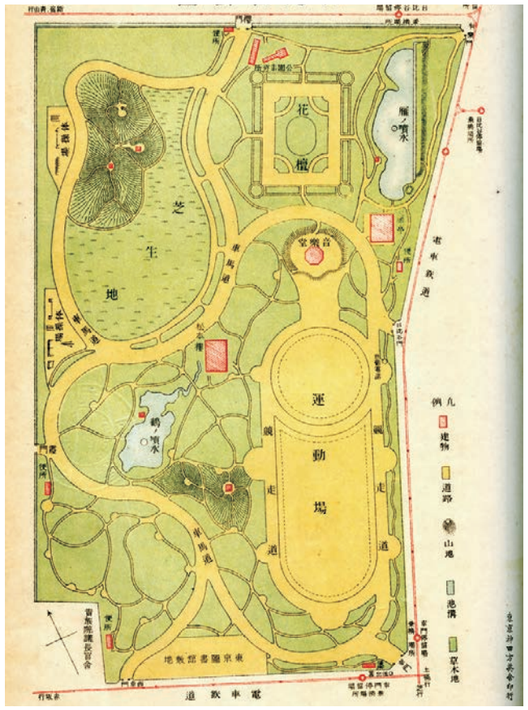
江戸時代には、「公園」という場は存在せず、社寺境内や広小路(広い街路)が、人々に憩いや楽しみを提供する場としての役割を担っていました。明治時代に入ると、政府は欧米都市が有していた「公園」という施設を導入することを計画し、明治6(1873)年に太政官(だじょうかん)(当時の最高官庁)から布達(ふたつ)が出され、旧社寺の境内を公園とすることが決定されました。これにより東京には、浅草、上野、芝、深川、飛鳥山の5箇所の公園が生まれました。

太政官布達による公園は、従来の神社仏閣の境内地を前提に作られたもので、市街地の改善整備と連動したものではありませんでした。市街地改善の一環としての公園整備は、明治21(1888)年の市区改正条例の制定をきっかけに検討され、明治22(1889)年の市区改正設計において、49箇所の公園の整備が予定されたものの、明治36(1903)年の市区改正新設計では22箇所に縮小されました。このような中、市区改正設計で告示された日比谷公園は、近代的な市民の遊歩地としての公園を目指して整備されました。日本の近代公園の象徴とも言え、明治36(1903)年に国内初の洋風公園として開園しました。



上野公園
上野公園が設けられた上野の山は、江戸時代には寛永寺の寺地でした。明治元―2(1868―69)年にかけて起こった戊辰(ぼしん)戦争の戦場となったため荒廃しましたが、すぐに掛茶屋が150軒近く立ち並ぶなどの活況を呈します。
その後、明治9(1876)年には上野公園として開園され、明治10(1877)年には内国勧業博覧会の会場として使用されるなど、新しい西洋文化が導入される起点の1つともなりました。
協力:こちずライブラリ「東京十五区分 下谷区」

明治期の上野精養軒
『東京景色写真版』国立国会図書館蔵
欧米視察から帰国した岩倉具視(いわくら ともみ)卿の勧めにより、上野公園開設に伴い、公園内食事処かつ社交の場として、明治9(1876)年に「上野精養軒」が開業しました。上野精養軒は文明開化の象徴の1つとして栄えました。



日比谷公園の全体図 出典:『東京案内 上巻』国立国会図書館蔵

日比谷公園の音楽堂 明治42(1909)年 『最新東京名所写真帖』国立国会図書館蔵

日比谷公園 『東京風景』国立国会図書館蔵

日比谷公園
日比谷公園は、本多静六(ほんだ せいろく)らによって設計案がまとめられました。明治21(1888)年に、青山に移った練兵場の跡地を活用して、明治36(1903)年に開園し、土地の整備を一から行った我が国初の近代的な公園となりました。

上野の博覧会

●明治10(1877)年8月21日から11月30日にかけて、上野公園で第1回内国勧業博覧会が開催されました。これは政府の殖産興業政策に基づくもので、内務省を中心として、農業・商業・工業を奨励し、国内各地の物産を盛んにすることを目的としていました。全国から集められた物産品は、鉱業と冶金術・製造物・美術・機械・農業・園芸の6部門とに分類され、部門ごとに異なる展示館で展示されました。また内国勧業博覧会は、第1・2・3回が上野公園で[第2・3回はそれぞれ明治14(1881)年、明治23(1890)年に開催]、第4回[明治28(1895)年開催]が京都の岡崎で、第5回[明治36(1903)年開催]が大阪・天王寺で行われました。

上野公園における内国勧業博覧会
「上野公園地内国勧業博覧会開場之図」
都立中央図書館蔵